

第18話 国際バカロレアプログラムについて

「詰め込み教育からの脱却」「考える力を育てる教育」とは、長いこと言われ続けています。2000年代に行われた学習指導要領の改定で授業時間の削減、「総合的な学習」の時間の新設が行われました。しかし、単純に授業時間を削減したぶん、思考する時間が増えはらずもなく、明確な指導案のない「総合的な学習」は、十分に活用されているとも言い難い状況です。全体的に準備不足に思える教育改革は、ゆとり教育として揶揄される結果となりました。

個人的には日本の詰め込み教育がそれほど悪いものとは思いませんが、積極性や自己主張という面では、海外の子どもたちに（大人も）遅れをとっていることは否めません。

さて、欧米的な多様性、グローバル人材の育成が叫ばれる中、文部科学省の主導で、国際バカロレアプログラムというものが推進されています。国際的な教育スタンダードを作ろうとスイスで生まれ、世界に広まっているカリキュラムです。日本人がイメージする国算社理とはやや違い、あるテーマに関して、いろいろな教科的視点で探っていく、というスタイルです。全人教育とでも言いましょうか。

その理念といった話は専門家に任せるとして、ここではもう少し具体的にバカロレアを見てみます。

・バカロレアプログラムとは
次の4つのプログラムからなります。

- ・プライマリーイヤーズプログラム (PYP) 対象：3～12才
→人間の共通性や、世界観といったものがテーマ。
- ・ミドルイヤーズプログラム (MYP) 対象：11才～16才
→実社会との関連性に焦点をあて、教科を学習。
- ・ディプロマプログラム (DP) 対象：16～19才
→国際的な大学入学資格を取得できるプログラム。
- ・キャリア関連プログラム (CP) 対象：16～19才
→各学校が行うキャリア関連教育の支援プログラム。

余談ですが、MYPは「数学なんて社会で必要ないじゃん！」という子どもの言い分を一蹴できますね。

これらの全部、もしくは一部を行う学校が認定校とされ、世界140以上の国と地域、国内では39校（2016年現在）となっています。また2018年までに、国内の認定校を200校へと増やすことが提言されています。

プログラムによって履修形態は異なりますが、以下はDPと大学入試についてお話しします。

・実際の勉強とは。

大学の科目選択をイメージしてください。言語、社会、理数、芸術といった科目群の中から6教科を選択し、各100～200時間程度、2年間に渡って学習します。これらは日本の学習指導要綱とは別物のため、日本の学習過程と並行して行う必要があります。両立の負担を軽減させるため、現在は単位互換制度などを整備している真最中です。

それぞれのコースで必要時間数を履修し、統一試験に合格することでDPが与えられます。

評価方法は、6科目各7点満点。これに加えて、TOK(Theory of knowledge「知の理論」)とEE(extended essay「課題論文」)の合計が3点、合計45点満点で評価がされます。24点以上で合格、高得点を取ることにより良い評価となります。GPA制度のようなものですね。

また、例えば数学では「数学HL(Higher Level)」「数学SL(Standard Level)」などのように、科目の中でレベルが設定されており、上級レベルから3～4科目、標準科目から2～3科目を選ばなければならないという規定もあります。

・バカロレア資格を取ると

実際にDPをとることで、どのようなメリットがあるのでしょうか。国や地域によって扱いは様々ですが、多くは大学の受験資格につながります。実際に日本内外で、どのような利用方法があるのかを見てみましょう。

【バカロレア入試を行っている日本の学校（抜粋）】

国際教養大学 国際教養学部

→IB入試。国内のDPを取得（もしくは見込み）していることが出願条件。本試験は、小論文と面接。

慶應義塾大学 法学部

→IB入試。国内のDPを取得していること。本試験は小論文と面接

早稲田大学 国際教養学部

→AO入試。SATやACTにならんで、IBが統一試験の成績証明となる。本試験は、面接と

東京大学 法学部

→推薦入試。IBを推薦資格として利用できる。その後、面接試験。

関西学院大学 経済学部

→IB入試。DP26点以上が出願条件。その後、論文と面接試験。

など。

（上記以外の学部、学校でも多数行われています。）

多くの学校がAO入試のような扱いをしており、DPを持っていることで出願資格をクリアし、その後面接や小論文といった本試験を受ける流れになります。

DP自体のスコアがポイントになることは、それほどなさそうです。

【海外でのバカロレア入試】

北米

そもそも入試という概念の薄い北米では、はっきりIB入試といったものはありません。高校の成績や活動報告に加え、DPなどの資格が、成績に加味されるという形です。

ボストン大学など、DPなどの「大学進学予備プログラム」を履修していることが出願条件になっている学校もあります。

また下記は、DPの成績が単位認定などの優遇措置になる例です。

・ハーバード大学

→上級レベル科目のスコアが7の場合、一部科目の単位を認定。

・コロンビア大学

→上級レベル科目のスコアが6以上の場合、科目ごとに6単位（上限6単位）を認定。

北米では、IBだけで入学出来るということはなく、一つのアピールポイントとして利用されている形ですね。まだまだ、SATなどの統一テストのスコアの方が重視されています。

イギリス

イギリスの大学への出願は、UCAS(Universities & Colleges Admissions Service)という機構を通して行いますが、そのUCASポイントと呼ばれるスコアにIBが換算されます。

(IB40点でUCAS611点、IB45点でUCAS750点)

オックスフォードやケンブリッジといったトップ校では、概ね40点以上のIBスコアが出願条件として求められる計算になります。

以上のように、まだIBは、数ある資格の中の一つとして捉えられており、DPを持っていれば大学入試突破、とはいきません。とはいえ、国の施策として推し進めているからには、国内での立ち位置は、どんどん変わっていくことでしょう。まずは2年後の200校で、本気度が分かります。

著者：谷口 仁
Nov 14 2016

